

龜谷
行

修身兒訓

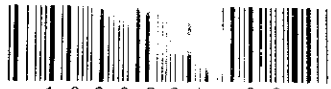
19

T 1A1

22

Ka 36

圖書刊行



a 1 3 8 0 3 2 1 8 3 6 a

福岡教育大学蔵書

龜谷省軒編

第四卷

脩身兒訓

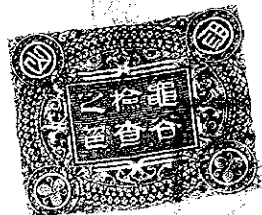
製本所弘文北舎

修身兒訓卷之四

龜谷行編

第一章 厚德

○今の人。恩惠を受けてハ多く記省せず。人
 小恵む所あまじ。微物と雖とも。亦歴々心小
 在り。古人言ふ。人小施し。ハ念ふ勿也。施を
 受けてハ忘る。勿也と。袁氏世範
 ○凡、恩澤を報いざるの地。小施を。便是陰徳



修身兒訓 卷之四

を積む。以て子孫に遺をあり。人をいへて怒る
と雖ども。敢て言わざらば。便是陰徳を損
する處あり。言行彙纂

○唐の王仲舒。寶帶を賣りて橋を滄臺湖中
築く。長三十餘丈。以て行人を濟す。世之を寶
帶橋と名づく。後三子皆貴顯あり。丹桂籍

○人妄りて樹木を毀損す。又蒸餅菓實。其他
有益の物を棄つるを。是天の賜をのを無益
に失ふの罪あり。若し此等の物を以て窮賤

此者。小與へば。慈惠の一端とるなり。勸善訓蒙

○晉陵の梅鱗。生平義を重んず。慷慨施を好
む。中年子あり。善を嗜むこと益篤し。親戚窘
乏の者あまた。輒之を救ふ。里黨の中咸仁人
長者を以て之を頌す。後二子を生む。家業巨
萬。壽七十に至る。丹桂籍

○高郵の張百戸。淮安に往き。舟を湖堤に泛
ぶ。遙く小船の波上は浮沈する。或見る人あ
り。舟の背に據り。救ひを呼ぶ。張急く白金十

兩を出し。漁舟を呼びて之を救ふ。至るに其子あり。同上

○蜀漢の張裔。少くして楊恭と友と善し。恭卒を。遺孤未だ數歳に及むず。裔も恭が母を迎へる之小事へ。恭が子の爲め婦を娶る。田宅を買ひて之に與ふ。人其義を重んず。後益州の太守と爲る。同上

○宋の吳奎少き時甚貧し。後資政殿大學士に除せらる。青州に知る。是に於て田を買

ひ義莊と爲し。以て族黨朋友を賙む。没するの日に至り。家小餘資なし。宋史吳奎傳

○宋の祖無擇。人となり義を好みて。師友に篤し。少くして孫明復に従ひ。經術を學び。又穆脩に従ひ。文章を爲る。兩人死す。力めて其遺文を求め。彙めて世に傳ふ。宋史祖無擇傳

○宋の沈淪相位に在るの日。歳の饑ゆるま値ひ。郷人乃粟を假る者多し。皆之を與へ。殆んど千斛に至る。後又盡く其券を焚けり。宋史沈倫傳

○陳璵家甚貧。義を行ふに急あり。常小諸子を戒めて曰く。貧乏の者小遇をも。宜しく力小随ひ。之を賑ふべし。若し富を待て。之を行ふも。吾が輩終小人を濟ふの期ありらん。畜徳録

第二章 躬行

○荀子曰く。凡そ百事の成るや。必之を敬をる小在り。其敗るゝや。必之を慢る小在り。故小敬。怠り勝てバ吉あり。怠敬小勝てを

凶あり。

○貝原益軒曰く。凡そ事を作を小。始を謹し。終を慮む。過寡く悔少し。故小事を作を小。先つ思ふ。思ふべし。て輕率に事残作せむ。必も過ちあり。過てバ必も悔あり。初學知要
○又曰く。學を思ひ小原づく。と雖ども。間思雜慮甚。心術小害あり。學者須らく胸中を。して泰然事なく。以て有用の思慮應接を待つべし。

○又曰く。輕惰二此者ハ學を爲すの大病な
る。輕き者ハ未だ得ざるを以て既得するを
爲し。惰る者ハ悠緩おして進むこと能はず。
張子曰く。輕きを矯め。惰るを警めと。
○又曰く。學者固より當小勉強して懈らざ
るを欲く。又須らく心志を寛舒し。精神を愛
養すべし。此の如くなむ。局促の態なく。從
容の象あり。二の者並び行を盡て相悖らざ
るべし。

○陳了翁間居と雖ども。容止常小莊敬な
り。苟も言を發せど。一日家人と語る。家人戲
て小問ふ是實なりや否やと。公退て自ら
責ること累日なり。曰く。吾豈小人を欺くこ
とおる。何為此ぞ此問ひあるや。劉氏譜
○宋の趙康靖嘗て二瓶を几上小置き。一善
念を起す毎に。一白豆を投し。惡念小ハ一黒
豆を投じ。始めハ黒き者多し。既小して絶く
少し。久りまば善惡都て忘る。瓶豆を亦用ふ

丹桂
籍

○清乃張敦復曰く。人之家小居り。身を立つる最奇を好むべからば。人能く倫常小於く缺くるおとろく。起居動作家を治め人を待つ。事々矩度小合ハズ。便是君子の人。豈小別小奇を尋ね怪を求むゆけんや。聰齋訓語
○宋乃劉元城司馬温公見て。心を盡し已を行ふの要。以て終身之を行ふべき者を問ふ。温公曰く其誠なり。元城問ふ。之を行ふ何

ぞう先小とん。温公曰く妄語せざるより始まる。小學

○中庸小曰く。君子の及ぶべからざる所の者ハ。其惟人の見ざる所なり。程子曰く。學を闡室を欺るばるより始まる。

○元の許魯齋河南を過く。道小梨あり衆争ひ取りて之を啖ふ。魯齋獨取らむ。或人曰く。世亂きて主あり。之を取るも何ぞ傷らん。魯齋曰く。我が心獨主なりらんやと卒小取ら

ぞく出る籍丹桂

○蘇黃門凡そ日中為る所の事。夜必ぞ之を紙に記す。人其故を問ふ曰く。事を為せむ。必ば天理に循ふ。敢て記せざる者も。敢て為さざるあり。同上

○羅馬帝泰タタス士。その志善を行ふに急なり。毎夜日間のをる所を省視し。或ハ一善あければ懊惱して曰く。嗚呼余一日を失ふと。西傳

纂雜

○佐藤一齋曰く。均しく是人あり。游惰をを弱あり。一旦困苦をせむ強とある。意に慍へば柔あり。一旦激發をせば剛とある。氣質の變化をること此の如し。言志錄

○明の蔡虛齋曰く。道德ある者ハ必ぞ多言せず。信義ある者ハ必ぞ多言せむ。才謀ある者も必ぞ多言せむ。惟夫の細人狂人妄人乃多言をる也。劉氏人譜

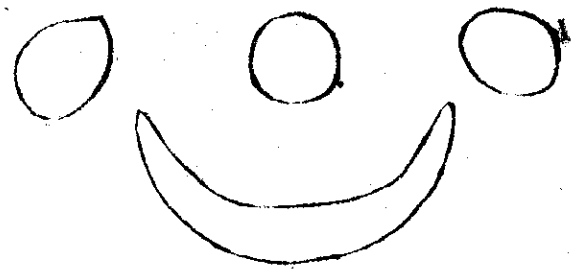
○明の薛敬軒曰く。人口を開けば皆能く禮

義を談ト。名節を論ず。利を見るお及でハ必
む趨り。勢を見てハ必む附く。又禮義名節の
何物たるを知らざる也。畜徳録

○宋の邵康節。其子伯温ふ告て曰く。汝固
り當お善を為さべし。亦須らく力を量り以
て之を為さへし。若し力を量らざれば。善と
雖とも。亦為す難かりべし。同上

○宋の潘叔度ハ。呂伯恭と同年進士とり。叔
度年長トて。其學伯恭ふ如うず。即首を俯し。

平心則無偏



弟子の禮を執り。之お
師と一こと事へ。略難む色
みし。朱子甚と稱歎を。

劉氏
人譜

○明の太祖曰く。凡そ
人善おむば。自りら矜
る難かりべし。自かた矜
れば。善日お削らる。不
善あらむ。自りら怨む

べりらに。自らも恕を遂ハ惡目も滋也。

○又曰く。人の常情。多く己が能ふ矜り。多く人の過を言ふ。君子ハ然らむ。人の善を揚げて。己が善ふ矜らむ。人此過をゆるして。己が過をゆるはむ。

○自らの謙をせむ。人愈服し。自らの誇をせむ。人必だ疑ふ。我恭をせむ。以て人の怒氣を平らむをべし。我貪をせむ。必だ人の争端を啓く我段也。是皆我も存する者なり。金言

○明の文徵明。人の過ちを聞くことを喜む。道ひ及むんと欲する者あまむ。必だ巧み他端を以て之を易へ。其説を竟へ去めぬ。其孫震孟。狀元も中り。名行俱は隆し。冊掛

○宋の范忠宣。子弟を戒めて曰く。人至愚と雖ども。人を責むるふは明あり。聰明ありと雖ども。己を恕むるときハ昏し。但當り人を責むるの心を以て人を恕すべし。習是

○韓非子曰く。智え目の如し。能く百歩の外

を見て。自うら其睫を見ること能はず。故に知るの難きを。人を見るに在らずして。自ら見るに在り。故に曰く。自から見る。之を明と謂ふ。

○力餘りあむを好事を行ひ。力足らざるは。好心を存す。力足らざるに。勉めて好事を行ふ。真に是、好事あり。力餘りありて。徒らに好心を存するは。好心と謂をざる也。習是編

○章文懿嘗て言ふ。學者身を奉ぐるに華侈

を好むべからば。苟も華侈を好めば。必ず食り得るを致せ。他日官に居り決して清白あると能はず。同上

○外にハ樂易なる姿態を顯む。快活なる情状を現すも。内に深沈の性質をけむ。人に尊敬せらるるは。西洋品

第三章

立志

○朱子曰く。學を為さるハ。先づ須らく志を立て。志既ふ立てば。學問次第に力を着

くべし。志を立てること定まらざれば。終る事を済ます。

○王陽明年十一。師ふ問ふ何をう第一の事と爲す。師言ふ。書を読む及第をするのふと陽明の曰く。此未だ第一此事とせず。第一の事を其聖賢たるに在る。畜徳録

○福格斯曰く。失敗をもども屈せず。進み往きて止まざる人も。吾が望の深く属する所あり。一試して功を成し。浮泛ふいて定らざる人小勝ること遠し。歐米志金言

第四章 愛日

○晉の陶侃曰く。大禹ハ聖人あり。寸陰を惜めり。衆人小至りてハ。當り分陰を惜むべし。豈逸游荒醉をべけんや。生て時を益みく。死して後を聞ゆること無き。是自うら棄るあり。

○人あり。細々里王地窩厄修上ふ請ふ。若し間暇あらば願くを謁見を得んと。王答へし。

めて曰く。天我を戒め。常々閑暇あらしめど。
西碑 雜纂

○若克孫曰く。世上の財貨も。耗散をと雖も。
も。後日の儉約も因り償ふことを得ぬ。今
日失ふ所の光陰も。誰う能く取り得る者有
んや。歐米立 志金言

第五章 學問

○司馬溫公曰く。書を誦を成さざるべから
ず。或を馬上もあり。或を中夜寐らざる時

も在り。其文を誦す。其義を思へる得る所
多し。

○司馬溫公賓客も對し。賢愚長幼を問ふこ
とあり。悉く疑事を以て之を問ふ。苟も取る
べきと有きば。手も隨て記録す。或は客も
對して即書す。率以て常と爲す。自警 編

○程子曰く。君子の學も必ず日々新なり。日
々新なる者も日々進む也。日々新あらばる
者も必ず日々退く。未だ進まばして退るが

於者有らざる也。

○貝原益軒曰く。日日新と云ふ者ハ。一日も一日の工夫あり。一歳も三百六十日の工夫あり。若し積て十年に至らば。其長進する所測るべうらば。故に學者ハ日々に新と云ふことを貴ぶ。

第六章 勉強

○中庸曰く。人一とびして之を能くせむを己に百たび。人十たびとて之を能くす

れば。己一とて之を十とびに果して此道を能くす。愚かりと雖ども必ず明か。柔かりと雖ども必ず強し。

○漢の董仲舒曰く。事を勉強に在り。勉強して學問をせむ。聞見博くして智益明あり。勉強して道を行へば。徳日不起りて大に功あり。

○漢に盧植と。馬融が學びて。能く古今に通ず。融が外戚を豪家あり。多く歌舞を列ね。植

侍講をること積年。未だ嘗て回顧せば、

を以て之を敬む。後漢書 盧植傳

○銹の鐵を腐爛するは、砥石よりも疾く。怠惰の人其傷害するも、工作に勞よりも速くなり。西洋品 行論

○人の一生を、始より終り至るまで、經驗習練の大學校と看做を、時ありて艱難辛苦の事も遇ふとも、之を天命ありと思ひ、務く學習せざるべからず。同上

第七章 倫常

○韓伯俞少しく過あり。其母之を答つ。伯俞涕下る。母此曰く。他日答てども汝未だ嘗て泣くべ。今泣くも何ぞや。對て曰く。昔々答て過て痛めり。今母衰老して力乏し。まゝ痛まゝむること能はず。是れ以て泣くあり。習是

○顧悌父の書を得て、必ず拜跪して之を讀み。句毎に應諾す。後子孫繁盛比ひか。丹桂

○父母卑賤にして。我幸小貴きことを得て

父母に恩を忘ることなく。之を尊敬をせし

若し高位高官に昇り。父母の恩を忘る者ら

其罪尤も大ありといふ。勸善訓蒙

○貝原益軒曰く。毎日夙に起きて家庭を掃

除し。先づ父母の氣色を候ひ。飲食乃好む所

を問て之を進め。求めおとむ之を奉じ。勉を

て其歡心を盡せべし。家道訓

第八章 處世

○呂叔簡曰く。世間往く處として意に拂ふ

事なきを無し。一日とふく意に拂ふ事なき

ハ無し。惟度量寛弘なきを受用の處あり。彼

の局量褊淺ある者も。空しく自づら懊恨を

るに。畜徳錄

○人剛を好めば。我柔を以て之に勝ち。人術

を用ふるを。我誠を以て之に感し。人氣を使

へば。我理を以て之を屈すべきは。天下處に難

き事なり。紳瑜

○人の我に負く我以て。善を為しの心を續
をこと勿せ。其徳を施さず當りく。たゞ自
ら我が心の忍びざる所を行ふのみ未だ嘗
て報を責めざる也。縦むよのちざる者ふ過
ふも。只一笑に付せよ。金言

○人此善性を發出せるハ患難禍災より善
きをみよ。譬へば香草の麗採りらば、馥郁
なる香氣を發するが如し。西洋品
行論

○義爾エリス金ギンの詩に曰く。禍難を苦痛を覺え

をぞと雖ども。實に福慶の積塊あり。然れど
も禍難の中より福慶を視出を人少あり。余
を禍難を以て。余を試るの洪爐とる。余を
鑄るの造錢局と思へり。西洋品
行論

○利久手爾リクス曰く。人貧困を受くとも。何ぞ怨
謗不平の語を出をを用ゐんや。貧困ハ恰も
處女に耳に刺さるゝの痛みより過ぎざるのこ
而して其創の中より貴重タカラの寶玉を掛ること
を得也。歐米文
志金言

○衆人廣坐の中よりハ爭論を慎むべし。爭論
を必ず黨派を起す。若し衆中より爭論發せむ。
溫厚の言戲謔此語を以て。之を勸解を要す。

智氏
家訓

○人乃謗果して實あらば。深く自より悔責
をべし。躬より省りて愧づること無くんと。
只之を聽ふんのも。前人云ふ。何を以て謗り
を止めん。曰く。辯ぐることに無し。辯ぐるゝと
愈力むを。謗ること愈巧なり也。金言

○凡、族衆假貸する所ありむ。吾が力量の厚
薄は随ひ之を與ふべし。必しも還せと言
えず。縦ひ其欲を満さむ。て之を怨むるも。
亦償ひ残責する時此甚しきに至らず。習是
編

○事を處する最熟思緩處を要し。熟思を盡
む其情を得。緩處すれば其當を得。最輕忽忙
亂をべからば。至微至易の者と雖とも。皆慎
重を以て之殘處すべし。同上

○泛交あるに費多く。費多ければ營も多し。

營々多ふ事を求多し。求多れば辱多し。惟事を省きて廉を養ひ。交を慎み。以て徳を成さべし。願體集

○常々勞作して已まず。職業の繁多なることを嫌えず。世務に任ず。他人と交通し。實事を磨礪する。人生の主義あり。西洋品行論

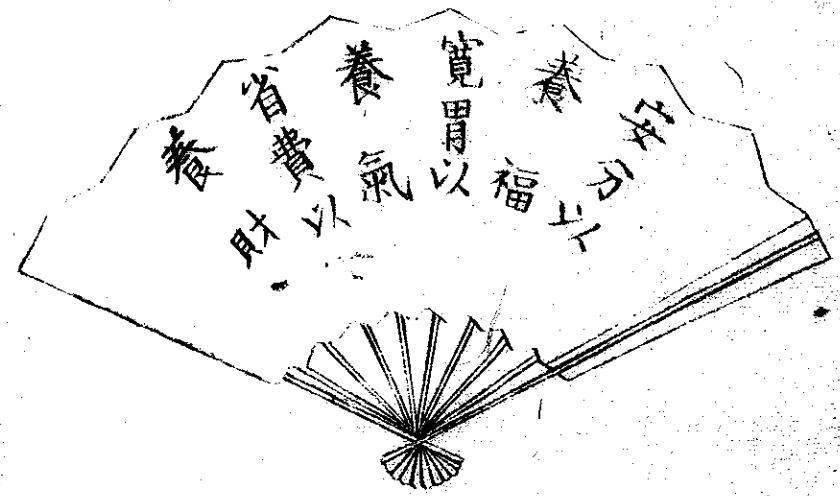
○凡、國家の禮文制度法律條例の類。若し能く熟觀して深考せば。以て世務に應酬し。時宜に戻らざる事。紳瑜

○富貴の家。貧賤ある親戚の出入するは。主人仁愛の厚きこと顯む。其家の榮譽あり。然るに或る之を耻り者あり。豈誤りあらばや。家道訓

第九章 交際

○君子の交りや。道義を以て合ひ。志氣を以て親む。淡きこと水の如し。故に能く久し。小人の交りや。勢利を以て結む。酒食を以て親む。甘き水と醴の如し。故に怨み易し。習是編

○貝原益軒曰く。君子
 の人子接る禮讓を以
 て之。故に争ふ所あり。
 夫れ才能を争ひ。功業
 を争ふ。権力を争ひ。意
 氣を争ふ。皆小人の爲
 也。所。禮讓の道に非ず。
 且禍を取る道なり。
 ○人不義の事と爲る



を見。諫めて之を止むべし。知て諫めを。諫
 めて力ぬぐ。友族して過ちを遂げ成さしむ
 るも。亦我分あり。智氏
 家訓

第十章 家制

○貧富俱に勤儉の二字を欠得ず。勤ハ孜々
 利を爲るに非ず。唯力を竭して經營をるに
 在り。儉も鄙吝堪へざるに非ず。只是入を量
 りて出をことと爲るなり。智是
 編
 ○苟くも節儉ありて。其家を保ち。其生を過

うあ。資産を小くせども精神は大なるこ
とを得べし。然らずして徒らに金錢を慕
ふ。此人を極く貪いと言ふも亦可なり。西洋
品行

論

○主人も一家の模範なり。我能く勤めむ。衆
何ぞ敢て惰らん。我能く儉めむ。衆何ぞ敢
て奢らん。我能く公ならむ。衆何ぞ敢て私せ
ん。我能く誠めむ。衆何ぞ敢て偽らん。類體
集
○他く此僮僕。我を遇する。或は不恭あるも。

彼と我と主僕に分る。較ひるは足らず。若
し自己の僕婢を之を戒飾せし。智氏
家訓

○權家の奴僕ハ。主人の權威を挾む。賓客
を侮り易し。主人たる者。時々心を用ゐて無
禮を戒むべし。奴隸の無禮を責むるは足ら
ぬ。賓客を誹りて其主人を誹るに至るは。家
訓

○陳確修曰く。此輩惟智慧あり。故に奴僕と
為る。若し亦智慧あらむ下賤と為らざる。此

を以て心も存せむ。自ら苛求をるに至ら
ず。丹桂
籍

第十一章

改過

○周子曰く。仲由を過を聞くことを喜び不
令名窮りる。今人過あるを。人の規をこと
を喜む。疾を護りて醫を忌むが如し。寧ろ
其身を滅せんと。悟るべきなり。

○魏の陽固も。少くして任侠。劍客を好む。生
産を事とせず。年二十六。始て節を振り學を

好み。遂に博覽多才あり。

魏書陽
固傳

○唐の李安遠少くして檢束なり。無賴の徒
と遊ぶ。産を破るに至る。晩に節を折り學を
嚮ひ。士大夫に従ふ。苟くも己に勝る。必ず
心を傾けて之に交る。安遠後懷州の刺史
に至る。新唐書
裴寂傳

○唐の趙武孟少くして游獵し。獲る所を以
て其母に饋る。母泣きて曰く。汝書を好む。武
孟放蕩也。吾安んぞ望んやと。為し食せず。武

孟感激し。遂に力学して右臺侍御史となり。
河西人物志一篇を著す。新唐書趙彦昭傳

第十二章 警戒

○善を為さば。重を負て山に登るが如し。忘
已の確と。と雖ども。力あらずざるを恐
る。惡を為さば。駿馬に乗て坂を走るが如し。
鞭策を加へずと雖ども。足亦止むこと能
は。省心
雜言

○堯戒ふ曰く。戰々慄々として。日一日を

慎む人。山に躓づくこと無く。崖に墮つ
く。是故に人皆小害を輕く。微事を見ど。以
て患を招くに至る。初學知要

○貧賤を勤儉を生じ。勤儉を富貴を生じ。富
貴に驕奢を生じ。驕奢を淫佚を生じ。淫佚を
復貧賤を生じ。此循環の情理なり。多識編

○一切の事。俱に儉朴誠實を要す。浮華を學
ぶをあらむ。蓋し浮華を一時を光耀と雖
ども。究に實事を益ふ。人の名を敗る禍哉

得る者。都て奢侈の致を所_レ由_ル。石天基知世事

○人生。世_ニ於て未_レだ心力を勞せざる者_ハあらば。或_ハ心_ヲを勞して力を勞せば。或_ハ力を勞めて心_ヲを勞せず。若_シ心_ヲを勞せど。又力を勞せば。生_カむ。乃_チ饑_ニ享_ス無用の人_{ナリ}。紳_ハ命

○佐藤一齋曰く。少く才ある者_ハ。往々好_ミて人を輕侮_ス。人を調笑_ス。失徳と謂ふべし。侮を受る者_ハ徒ら_ニ己まば。必_ズ憾_ミとく之を譖_ル。即ち自_ラうと譖_ルあり。言志録

○幼くして肯て長_ニ小事へば。賤くして肯て貴_ニ小事へむ。愚_キにして肯て賢_ニ小事へば。此_ハ是_レ人の三不祥_{ナリ}。總て是_ハ傲氣害_ヲを為_スの_ニみ。世人_ハ先_ニつ傲氣を除き去_リ。纔_ニ小事を成_スを_レ得_ル。知世事

○貴くして傲慢ある人も。氣球の膨脹して昇騰せる者_ハ等_シ。只其外_ニ貌を裝飾して。内_ニ部を實_ニ空虚あり。勸懲雜詠

○日耳曼人の語_ハ曰く。大人の品行の中_ニ小

於て其瑕疵あるを搜り出をを以て事務と

ふ人あり。痛_ニき性情と謂_フむ。西洋品_ニ行論

○貝原益軒曰く。易曰く。天道を満つるを

虧くと。又古語小曰く。多く藏むを厚く失

ふと。蓋し多く財を聚めて。人の貧苦を救

ぐむを。必ず其財我失ふに至る。家道訓

○程子曰く。吾未_レど財を蓄_フして。能く善を

為_スる者を見ざる也。吾未_レど誠_ニおとどいて。能

く善を爲_スる者我見_ルるあり。畜徳録

○餘う有るを待て人を救む。必ず人を濟

ふの日なり。暇あるを待_テ書を読まむ。終_ニ

書を讀むの時あり。紳瑜

○人の書籍を翻へし。人の書案を塗り。人の

花木を折り損ふを。みる人小厭_ムるゝの事

なり。竊_ニりよ人の篋中の字跡を窺_フむ。尤も

不可_レあり。金言

○仙培_セ那_{ハナ}徳_{トク}曰く。我他人より害を受くとも

之を忍べを轉_リて有用の物とあるを得べ

し。唯吾が眞實の害とあり。苦患を興ふる者
を。自己の過失に由りて得ざるをの也。西洋
品行
論

○陳幾亭曰く。君子ふ二の恥あり。能くをる
所を矜る恥あり。能くせざる所を飾る恥あり。
能くをるを謙して以て之を居る。能くせ
ざるを學びて以て之を充つ。蓄德
録

○洪自誠曰く。耳中常ふ耳に逆ふの言を聞
き。心中常ふ心に拂ふ此事あり。纔ふ是德ふ

進む行を修むるの砥石あり。若し言々耳を
悦む。事々心を快くせむ。便此生を把て鴛
毒の中ふ埋むるなり。菜根
談

附錄

揚子雲前漢人 陸宣公唐人名 程子宋人 兄弟明道
川ト 荀子周人 光武後漢帝 劉秀光武 顏之推齊人
稱ス 陸桴亭明人 韓退之唐人 薛文清明人
分子 陸桴亭明人 韓退之唐人 薛文清明人
費元祿明人 魏環溪清人 程漢舒清人 馬援漢人
漢人 陶淵明晉人 倪文節宋人 許平仲元人 譚子
唐人 陳幾亭明人 吳懷野明人 劉宗周明人 司馬溫公
名峭 陳幾亭明人 吳懷野明人 劉宗周明人 司馬溫公
宋人 名光 胡文定宋人 辛文懿明人 陳子翁明人
字君實 胡文定宋人 辛文懿明人 陳子翁明人
韓伯俞漢人 呂叔簡明人 倪正父明人 洪自誠明人 周子

宋人 名陳 陳璣明人 蘇黃門明人 顧悌明人 陳確修明人 張
敦頤明人 鄭叔通明人 梅鱗明人 張裔明人 履歷明人 禮誥爾圖明人 勃
百戶明人 彌爾烈爾明人 坡可羅明人 禮誥爾圖明人 勃
人蓋明 彌爾烈爾明人 坡可羅明人 禮誥爾圖明人 勃
古斯敦英人 福格斯英人 谷惹西英人 戎孫英人 若克英人
孫義爾士金 那比爾明人 伯氏明人 倍根明人
コルース明人 プロナトン明人 スマイルス明人
ツトン明人 富爾拉明人 セシル明人 宅林登明人
詳ナラガ 富爾拉明人 セシル明人 宅林登明人
ドモ大抵英人ニ係ル

明治十三年十一月廿五日版權免許

同十四年六月二日出版

東京府士族

光風社長

編輯并出版人

龜谷行

東京御徒町二丁目六十七番地

留山東中山下

製本所 大島勝海